

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25293462

研究課題名(和文) 長期療養施設における慢性痛ケアの質向上のための教育プログラム開発

研究課題名(英文) Development of Quality Improvement Strategies for Care of Chronic Pain in Long-term Care Facilities

研究代表者

山本 則子 (Yamamoto-Mitani, Noriko)

東京大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：90280924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、医療療養病床における慢性痛ケアの質向上のための教育プログラムを開発することを目的として取り組んだ。現場スタッフへのインタビューおよび全国実態調査では、看護師・介護士等が多忙でストレスの高い状況であり教育的な介入を受け入れる余裕のないことが窺われた。このため以下を試みた：効果的なケアの実践事例の事例検討会を継続的に実施し、ワークエンゲージメントや仕事のやりがいを高める。Long-term Care研究会を立ち上げ、施設の枠を超えた情報共有の場を提供する。Person Centered Careについての学習会を試みた。ケアの質指標の開発を試みた。成果はウェブサイトにとまとめる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at developing an educational program to improve the care of chronic pain in long-term care hospitals. In the interviews to the staff and the nationwide questionnaire survey, it was found that the care staff were very busy with high stress, and any educational program was not considered acceptable. Therefore instead we attempted the following activities: 1) case conferences in which the staff members examine successful cases so that they can appreciate the value of care they provide and have elevated work engagement; 2) we established the long-term care research society in which the staff members can communicate beyond facility boundaries; 3) we attempted letting the staff members learn person centered care; and 4) we developed process- and outcome-oriented quality indicators for elderly care. We are to open a website and share our findings.

研究分野：高齢者看護

キーワード：質改善 医療療養病床 ケアの質 高齢者

1. 研究開始当初の背景

今日の我が国における療養病床における慢性痛ケアの質向上のために必要とされることは、確立された慢性痛ケアの知識をケアプロトコルとしてパッケージ化、プログラム化し、望ましいケアを実施する上での課題・困難を踏まえ、それらの対処も含めた教育プログラムとして構成することと思われた。

望ましいケアの教育普及のための課題としては、学習に関するスタッフの準備性を高めること、日々のケア手順に慢性痛ケアのプロセスを組み込むこと、ケア実施上不明点が生じた場合の相談先を定めることなどが想定されるが、より良いケア方法の確立そのものだけではなく、そのような教育枠組み作りを含めたアプローチこそが求められていると思われた。

2. 研究の目的

本研究では当初、以下を目的として取り組みを行った。1. 国内外で確立された慢性痛ケアのプロセスを、日本の長期療養施設の状況に見合った形でプロトコル化し、看護師が一般的に教育普及しやすい形に整理する。2. 長期療養施設における望ましい慢性痛ケアの実践を阻害する各種要因を明らかにし、その対応策を探索的に整理する。3. 1,2.の成果に基づき、長期療養施設の看護師を対象とする慢性痛ケアに関する教育プログラムを開発・試行して実施可能性を検討する。4. 慢性痛ケアに関する教育プログラムに用いる教育的素材(パワーポイント等)は、ウェブサイトを通じて発信し、誰でも使用できる形で提供する。

3. 研究の方法

本研究では、7つのステップでプロジェクトを進めた。

- Step 1 長期療養施設における高齢者の慢性痛ケア実践についての文献検討
- Step 2 療養型病床の職員を対象とした慢性痛ケア実践に関するインタビュー調査
- Step 3 長期療養施設におけるケアの質保証に関する海外視察および意見・情報交換
- Step 4 療養型病床の看護師長・スタッフナース・ケアワーカー(介護職)を対象としたケア実践の実態調査
- Step 5 長期療養施設におけるケアの質向上を目指した支援方法の立案
- Step 6 長期療養施設におけるケアの質向上を目指した研修の試行
- Step 7 長期療養施設におけるケアの質管理・向上に関するウェブサイトの立ち上げ

4. 研究成果

Step 1 文献検討・学会での情報収集
慢性痛の緩和に関しては、多職種連携による介入により疼痛が有意に軽減された報告があった。薬物療法、運動などの身体活動、友

人や家族からのソーシャルサポート、鍼、温熱、休息、食事療法、生活スタイルの変更などが疼痛管理に有効と考えられた。認知症高齢者に対する痛みのケアでは、標準化されたアセスメントツールがあり、ケアでは認知行動療法の介入効果が効果的という報告があった。

長期療養施設のケアの質保証・質改善に関する文献検討では、国内文献が著しく限られている一方、海外文献では米国を中心に蓄積が見られた。イノベーション普及理論等の理論枠組みに沿った戦略的な介入が報告されていたほか、質改善の促進要因として11要因、障壁として6要因にまとめられた。

ケアの質改善の促進要因
理論モデルを活用する
多職種チームの設定
良好なコミュニケーション
明確な評価を実施すること、フィードバックがあること
十分かつシンプル・短時間の教育
現場管理者のエンパワーメント
動機付けを高める
医師を巻き込む
システムに入れ込む
外部組織と情報交換
専門領域に関するチャンピオンを作る

ケアの質改善の障壁
資源が不足していること
スタッフのコントロール奪われると認識されること
質改善の取り組みと対立する事情があること
管理者・スタッフ等の離職
組織内のコミュニケーションの不足
情報の不足

学会では、長期ケア施設のケアの質の改善を客観指標で示すことがしばしば困難であることが報告されていた。

Step 2 インタビュー

医療療養病床を含む3病院の職員(看護職・介護職・社会福祉士・薬剤師・栄養士・医師・事務職員など)計39名に対し、療養病床におけるケアの質についての意見を聴取した。施設間で共通する知見は以下のようなものである:一定のケアの質は確保されているものの個別性や社会性の点で課題もあると認識されている。その達成には人員が圧倒的に不足しており、機能別のケア提供により高齢者像がつかみにくなっている。長期療養におけるケアのモデルや質評価指標が得にくく、ゴールの達成感や良い自己評価が持ちにくい状況がある。他職種間のカンファレンスを実施し情報共有による意思統一の効果を実感している。各種の勉強会等を実施し質改善に努めている一方、組織理念の職員への浸透の程度と職員間の関係には、施設・職場により相違がみられた。

職種ごとの特徴には、以下のようなものがあった:看護師・介護士は、最低限のケアと安全確保に精いっぱい、高齢者や家族の個別の意向に沿えないことや、自身の身体的負

担が増すことに対するつらさを抱えていた。看護・介護以外の職種は忙しい看護・介護を気遣い、積極的に病棟に出向いて高齢者の状況を把握する、業務改善を工夫する、必要な知識を補う、など負担軽減のための支援に努めていたが、ケアスタッフはそのことを認識していないようだった。また、看護・介護以外の職種では、専門職ごとの境界・学会や研修会など、職場外に出たケアの質改善の努力が見られた。管理者はスタッフの困難を積極的に聞き取り、ともに努力する姿勢を示す一方、業務改善を模索していた。

以上より、当初想定していたケアスタッフへの教育的介入は、過重負担を感じているケアスタッフに受け入れられることは困難と思われる。日本の状況に応じたケアの質向上への支援策を、現場の意見をもとに考えることとした。合わせて、質評価指標の作成が急務と思われた。

Step 3 海外視察および意見・情報交換

米国・香港・英国・オランダの高齢者長期療養施設を視察した。文献検討で伺われたとおり、長期療養施設のケアの質に関するシステムティックな試みは米国が中心であり、他のアジア・ヨーロッパ諸外国では、部分的な学びはあるにしても、長期ケアの質へのシステムティックな評価支援機構は発展途上であることが窺われた。

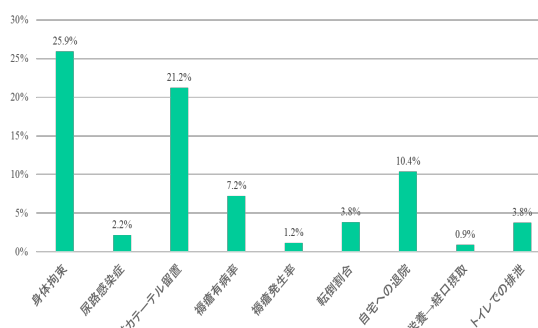
Step 4 療養病床におけるケアの実態調査

全国の医療療養病床を持つ病院の看護管理者・看護師・看護助手(介護士)を対象に、ケアの質(慢性痛のケア及びケアの質全般)と、労働価値観・ワークエンゲージメント・バーンアウトに関する調査を実施した。調査協力施設 269 施設から、257 名の看護部長、3,279 名の看護師、252 名の看護助手(介護士)の回答を得た。

痛みに関しては、看護師が痛みを持つ入院患者は全体の約 3 割と評価した一方で、介護士は半数以上の患者に痛みがあると評価した。慢性痛のケアに関しては、看護師は半数以上が痛みのアセスメントを実施していると回答したが、表現できない患者に対してもアセスメントするという回答は 2 割弱、疼痛の種類に応じたアセスメントを実施するというは 1 割強にとどまった。薬物の使用に関し、アセトアミノフェンを第一選択に検討すると回答した看護師は 5 割弱、NSAID の服薬に際し副作用をアセスメントする看護師は 4 割弱にとどまった。

ケアの質全般に関しては、保清や食事介助、合併症予防などに関するケアはできていると考えている回答割合が高かったが、レクリエーションや自立度の維持・回復に関するケアは出来ていると考えている回答割合が低かった。

調査結果をもとに、長期ケアの質指標を作成した。まず、病棟単位のケアのアウトカム質



指標の平均値 (調整なし; %)

指標では否定的な側面だけではなく肯定的な側面も指標化を試みた。指標の候補は以下の通りである: 身体抑制、尿路感染症、尿道カテーテル留置、褥瘡有病率および発生率、転倒割合、自宅への退院、経口摂取回復、トイレでの排泄回復の 9 指標。このほか、ケアのプロセス指標も作成を試みた。

尿道カテーテル留置と転倒割合、自宅への退院は入院患者の医療区分(どの程度の医療処置を必要としているか)と ADL(日常生活活動度)の割合に依存したため、調整した指標の作成を試みた。これらはさらに検討を重ねる必要があるが、ケアの質改善の指標、ベンチマークなどで活用できる可能性が窺われた。

さらに、この指標を用いてケアの質の関連要因を検討した。重回帰分析の結果、自宅への退院には看護師・患者比、病院の規模、看護師の平均年齢が有意に関連した。トイレでの排泄回復に関連する要因はなかった。転倒割合、身体抑制、および尿路感染症の関連要因には、スタッフのバーンアウト、患者の医療区分が高いこと、精神科のあること、ケアプロセス評価、および看護師・患者比が関連していた。この結果から、患者アウトカムを改善する上で、ケアのプロセス評価とスタッフのバーンアウトを改善することの有用性が示唆された。

看護師のワークエンゲージメントやバーンアウトは本人の労働価値観との関連が見られたが、価値観の内容(内的 vs. 外的労働価値等)により関連にばらつきがあった。

Step 5-6 長期療養施設におけるケアの質向上を目指した支援方法の立案と試行

以上の結果から、療養病床のケアの質を向上し、合わせて看護師・介護士等ケアスタッフのワークエンゲージメントや QOL を高める働きかけの例として、ケアスタッフを対象とした事例検討会の試行を開始することなど、3 種類の介入を試みることにした。

まず、地域病院において事例検討会を試みた。また Long-term Care 研究会を立ち上げ事例研究ワークショップおよび発表を実施した。さらに、パーソンセンタードケアの日本の施設での有用性を検討した。

慢性疼痛のケアの質向上のための我々の

アプローチは、教育や実践方法の組み換えではなく、ケアスタッフと研究者が共催する事例検討会による、ケアの意義・価値へのスタッフの気づきと自己効力感の向上を通じた質向上である。月に一度の検討会の継続的試みから持続可能なプログラムを探索し、参加者へのインタビュー調査により評価した。この事例検討会では、効果的な支援の実践事例を振り返る。年度の当初は、ケアの意義・価値に関する概念化を試み、そこから自らの実践に価値を見出すことで自己効力感を向上させることを狙った。しかしインタビュー調査において、概念化は敷居が高く意義が見出しにくいという指摘を受けた。そこでより平易にし、実践の優れた点、参考にしたい点などをグループで話し合い共有するという事例検討会の基本枠組みを構築した。数回の試行をへてこれが実践現場になじむ感覚を得た。事後評価として全スタッフ対象の調査を計画した。

また、一昨年に実施したインタビュー結果に基づき、施設を超えたケアの質向上の取り組みとしてLong-term Care Quality研究会を立ち上げ、第1回の研究会を開催した。研究会では事例研究方法についてのワークショップと、看護実践の事例検討を3件発表しグループワークで看護実践の意義・意味について話し合った。研究会前後に調査を実施して効果を検討した。

さらに、パーソンセンタードケア実施プログラムも検討し、介入前後を比較した。短期効果は一部に見られたが、これも今後長期評価を継続の予定である。

Step 7 長期療養施設におけるケアの質管理・向上に関するウェブサイトの立ち上げ

以上の結果をもとに、Long-term Care研究会のウェブサイトを作成している。まだ公開できていないが、アウトカム指標、プロセス指標を用いた全国調査の結果を掲示してベンチマークできるようにすること、ケアの質向上を目指した事例検討会の方法に関する情報等を共有できるようにする予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Abe Y, and Suzuki M. Literature review of pain management for people with chronic pain, Japan Journal of Nursing Science, 査読有、12巻、2015、167-83、DOI: 10.1111/jjns.12065.

鈴木みずえ、山本則子、高井ゆかり、古田芳江、鈴木由紀、金森雅夫 認知症高齢者の痛みに関するアセスメントツールとケア介入、日本早期認知症学会誌、査読有、7巻1号、2014、53-58

平尾千恵子、鈴木美穂、吉田千香、山本則子 英国視察から学んだ看護：患者中心のケアを可能にする継続的看護、週刊医学界新聞、査読無、3105号、2014、2

〔学会発表〕(計14件)

Suzuki M, Igarashi A, Takehara K, Takai Y, Yamamoto-Mitani N. Quality improvement interventions in long-term care facilities. A review of interventional studies. The 34th Gerontological Society of America Annual Scientific Meeting. 2014.11.6. Washington DC.

山本則子、高井ゆかり、鈴木美穂、五十嵐歩、竹原君江 長期療養施設におけるケアの質向上の取り組みに関する文献レビュー、日本老年看護学会第19回学術集会、2014.6.28.名古屋

Takai Y, Yamamoto-Mitani N, Igarashi A, Saito Y, Fujii F. Health care staff's perceptions and attitudes toward quality of care at long-term care facilities in Japan. The 4th Global Congress for Qualitative Health Research. 2015.3.17, Merida.

Yamamoto-Mitani N, Saito Y, Fujii F, Futami A, Takai Y and Igarashi A. Perceptions on providing quality care at long-term care hospitals in Japan: Interviews to nurses, care workers and their supervisors. International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Meeting. 2015.10.19. Chiang Mai.

山本則子、五十嵐歩、高井ゆかり、斎藤弓子、藤井文香、二見朝子 療養病床におけるケアの質向上に向けた管理的な工夫、日本慢性期医療学会第23回学術集会.2015.9.9.名古屋

高井ゆかり、山本則子、五十嵐歩、斎藤弓子、藤井文香、二見朝子 長期療養施設に勤務する職員によるケアの質向上に向けた工夫：部門を超えた協働、日本慢性期医療学会第23回学術集会.2015.9.9.名古屋

斎藤弓子、藤井文香、二見朝子、五十嵐歩、高井ゆかり、山本則子 医療療養場型病床におけるケアの質に関する職員の認識：他職種へのインタビュー調査をもとに、日本慢性期医療学会第23回学術集会.2015.9.9.名古屋

Yamamoto-Mitani N, Takai Y, Saito Y, Igarashi A, Ishii A, Jojima H, Futami A, Nakano H. Case conference as a tool for elder abuse prevention: A facility-university joint project. The Geological Society of America 34th Annual Scientific Meeting, 2016.11.18. New Orleans

Saito Y, Igarashi A, Noguchi-Watanabe M, Takai Y, Yamamoto-Mitani N: Work values and their association with burnout and work

engagement of nurses in long-term care hospitals, The Gerontological Society of America 34th Annual Scientific Meeting, 2016.11.20, New Orleans

齋藤弓子、二見朝子、五十嵐歩、野口麻衣子、山花令子、高井ゆかり、山本則子。医療療養病床で働く介護職者の「バーンアウト」とワークエンゲージメントに関連する要因の検討。第24回日本慢性期医療学会学術集会。2016.10.28. 金沢

古木晴美、齋藤真美、中野博美、齋藤弓子、五十嵐歩、山本則子。退院後の事例検討会での振り返りからの学び - 医療依存度が高い高齢者の退院支援からの学び - 。第24回日本慢性期医療学会学術集会。2016.10.28. 金沢

齋藤真美、古木晴美、中野博美、齋藤弓子、五十嵐歩、山本則子。回復期リハビリテーション病棟における医療依存度が高い高齢者の退院支援 - 退院後の事例検討会での振り返り - 。第24回日本慢性期医療学会学術集会。2016.10.28. 金沢

山本則子、齋藤弓子、二見朝子、野口麻衣子、山花令子、高井ゆかり、五十嵐歩。医療療養病床におけるケアの質管理・向上のための工夫：病棟看護管理者への全国調査より日本慢性期医療学会第24回学術集会。2016.10.28. 金沢

高井ゆかり、山本則子、齋藤弓子、五十嵐歩、山花令子、野口麻衣子、二見朝子。Prevalence of low back pain among nurses working at long-term care hospitals 日本看護科学学会第36回学術集会。2016.12.11. 東京

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 則子 (YAMAMOTO-MITANI, Noriko)

東京大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：90280924

(2)研究分担者

高井 ゆかり (TAKAI, Yukari)

群馬県民健康科学大学・看護学部・教授
研究者番号：00404921

五十嵐 歩 (IGARASHI, Ayumi)

東京大学・大学院医学系研究科・講師
研究者番号：20595011

齋藤 繁 (SAITO, Shigeru)

群馬大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：40251110

鈴木 みずえ (SUZUKI, Mizue)

浜松医科大学・医学部・教授
研究者番号：40283361

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

齋藤 弓子 (SAITO, Yumiko)